Ⅰ　概要

研究開発の概要

実 施 計 画 書（普 通 科 改 革 支 援 事 業）

１　事業の概要

（１）学際領域学科又は地域社会学科を設置する学校名・設置（予定）年度

公立・私立・国立・株立の別	学校名（ふりがな）	学科の種類	設置（予定）年度	決定
公　立	愛媛県立三崎高等学校（えひめけんりつみさきこうとうがっこう）	地域社会学科	令和６年度	

（２）学校の詳細

課程別	新学科の収容定員	学年制・単位制の別	学科の名称（決定している場合）
全日制	60 名	学年制	未定

※課程別は、全日制・定時制・通信制の別を記載すること。

（既存の学科を転換する場合は、以下も記載）

現在の生徒数	現在の学科の種類	現在の学科の名称
140 名	普通科	普通科

（３）当該学科における特色・魅力ある先進的な教育の取組について

各教科において、**「地域社会とつながる授業」と地域連携を軸とした新たな「教科等横断型授業」の実施**を二つの大きな柱として取り組み、**本校独自のＳＴＥＡＭ教育を実践**する。

・これまで「総合的な探究の時間」を中心に行ってきた探究活動を、教科等横断的に行い、**各教科の学習を実社会と結び付ける**ことで、これまで以上に生徒の学びの自走性を高めるとともに、**生徒の進路希望に合わせて一人一人に個別最適化された学習活動を実施**する。

例）理　科：再生可能エネルギーの発電効率の研究
商業科：プログラミングを用いたマーケティング
地歴科：小・中学校と連携した防災に関する授業

・地域課題の発見や解決へのアプローチなどを通して、これまで以上に地域社会と深くつながり、生徒の資質・能力を高めることで**「ブーメラン人材」を育成**する。

※ブーメラン人材…再び地域に戻り、進学先や就職先で身に付けた広い視野、高い専門性、豊かな人脈を利用して、生業・事業・産業を創出する人材。求められる資質・能力としては、郷土愛、地域活性化への使命感、課題解決力、ネットワーク構築力、コーディネート力などが挙げられる。

〇地域社会とつながる授業

本校では、これまでも「総合的な探究の時間」や学校設定科目「未咲輝（みさき）学」で地域と連携して探究活動を行ってきたが、時間数が限られていた。今回、地域社会学科（仮）の設置に当たり、地域探究活動に関係する**特色ある学校設定科目「地域文化と国語」（２単位）、「郷土芸能概論」（３単位）、「トライブラーニング」（４単位）**、など地域資源を最大限に生かした、**本校でしか学ぶことのできないオンリーワンの授業を展開**していく予定である。

このことにより、地域社会とより深くつながる取組を実施できる。例えば、県外高校とのオンラインでの定期的な交流や中学校・企業などと連携した地域探究活動、地域の大人を巻き込んだキャリア教育などが挙げられる。また、昨年度は、**コンソーシアムに専修大学が加わり、更に今年度は大正大学が加わる**こととなっており、研究室訪問等の県外フィールドワークや来県した大学生との交流など、地元地域だけでなく、全国ともつながる探究活動を実施していく。その際には、他県に先駆けて配備された一人１台端末を最大限活用し、ウェブ会議システムやチームコミュニケーションツールなどで、より充実した活動としたい。

また、本校独自に、**地域人材や外部人材などをリストアップすることにより、「地域特別講師データベース」**を作り、地域探究活動の内容にあった人材をすぐに検索し、よりスマートな活動にすることとしている。

以上のような取組を実施することで、郷土愛や地域活性化への使命感など、「ブーメラン人材」に求められる資質・能力の育成につなげるとともに、実社会や日常生活の課題を発見・解決し、**変化の激しい社会をたくましく生き抜くことができる人材の育成**につなげていきたい。

〇教科等横断型授業

これまでのカリキュラムでは、各教科、単元において、教科等横断型授業の計画を作成する際の日程調整が課題となっていた。しかし、各教科において**あらかじめ教科等横断型授業を組み込んだ年間指導計画を作成**しておくことで、スケジュールの管理が容易になり、計画的かつ継続的な教科等横断型授業の実施が可能となる。また、現在行っている「未咲輝（みさき）学」で取り入れている**データサイエンスやプログラミング教育なども積極的に取り入れ、科学的な根拠に基づいた課題解決能力の育成**にもつなげたい。

また、教科等横断型授業が、異なる教科の単なるコラボレーションになることがないよう、実社会や日常生活における課題を設定し、それを異なる教科の視点から解決していくことを通して、**「多面的に学び、考える力」**を身に付けさせたい。

以上のような取組を実施することで、**新たな価値観や生き方を生み出す「デザイン思考」を身に付け、地域社会とつながることのできる人材の育成**につなげていきたい。

２　事業の目的等

（１）学際領域学科又は地域社会学科を設置する高等学校を取り巻く状況の分析、学際領域学科又は地域社会学科を設置する必要

◯本校を取り巻く状況

西宇和郡伊方町唯一の高等学校である本校では、進学や就職を機に都市部へ転出する生徒が多く、地域活動の担い手不足が深刻化している。このような状況の中、本校では、進学先や就職先で身に付けた広い視野、高い専門性、豊かな人脈を地元に戻って活用し、生業・事業・産業を創出する**「ブーメラン人材」の育成**を目標として、**地域との協働活動に積極的に取り組むことができるカリキュラム開発や、コンソーシアムの構築などに取り組んできた**。このような取組を通して、町内における高等学校の立ち位置を、地域の若者を町外へ送り出す「出口」から、町内はもちろん、全国の若者を呼び込み地元への定着率を向上させるとともに、「ブーメラン人材」が他地域とのパイプ役となることで移住者を増加させ、持続可能な地域を創ることができる「入口」への変化を図ってきた。

◯「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」以前の取組（Ｈ27～Ｈ30）

主に地域住民や団体など地域側のニーズに応える形で多くの活動を実践し、**地域全体を学びの場として捉え、地域課題の解決を目的とした探究活動を行うことで、調整力やコミュニケーション力などの生きる力を育んできた**。その中で、生徒の主体性を育む活動に重点を置き、愛媛県内・外の高校生や大学生を招聘し、各地の地域活性化活動事例を発表・共有し、より高度な活動に向けたネットワーク形成の場として、**全国の高校生・大学生等と交流を持つ高校生シンポジウム「せんたんミーティング」を主催する**などの取組を行った。一方で、カリキュラムの編成上、体系立った効果に導きづらい側面も見られた。

◯「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」での取組（Ｒ元～Ｒ３）

それまでの課題を踏まえ、生徒の自主的な取組を活動の中心に据えながら、より高度な新カリキュラムの編成や組織編成に取り組み、**「地域理解」「地域課題の発見・解決」「ブーメラン人材の育成」を３年間継続して行うことができる学校設定科目「未咲輝（みさき）学」**の開設・運営を中心とした整備を行った。また、組織づくりとしては町役場や地元ＮＰＯ団体といった、地域に深く根差した団体に加え、県内外の大学等の教育機関にも参加していただき、地域の実態に即したコンソーシアムを編成した。これらの取組により生徒たちの探究活動はこれまで以上に広がりと深みを増すことになった。年度当初と年度末に行っているルーブリックを用いた生徒の自己評価において、計画力、判断力、実践力、調整力、コミュニケーション力という全ての項目で、年を追うごとに成長が見られている。本校の探究活動は、**外部人材と関わりながら生徒自身が企画・実践を進めていくという特徴があるため、特に、生徒の計画力、調整力、コミュニケーション力をしっかりと育むことができる**。また、令和元年度から本格的に県外生徒募集を開始し、本校の教育活動に関心を持った**県内外からの入学生が増加したことで、地域からも高く評価**していただいており、新しい学校の在り方や教育活動について研究を重ねている。

◯必要性

以上のようなことを踏まえ、「学校」ではなく「地域」という枠組において、生徒一人一人に個別最適化された学びをこれまで以上に提供していく必要があると考えている。そのためには、学校内外の多様な人たちと関わり、対話しながら、生徒を「社会に生きる一人の人間」としてたくましく育てていくことができる学校づくりを推進していくことが必要不可欠である。**「社会とつながり、たくましく生き抜くことができる生徒の育成」**を目標とし、**外部人材との連携に加え、各教科・科目における単元の縦断化や教科等横断型授業などを柱としたカリキュラムの再編を高いレベルで行っていくためにも、本校が地域社会学科を設置する必要性がある**。

（２）学際領域学科又は地域社会学科における取組の目的・目標（学際領域学科又は地域社会学科における教育を通じて育成を目指す資質・能力を含む

〇目　的

・「社会に生きる一人の人間」として、変化の激しい**社会をたくましく生き抜く**ことができる人材の育成

・**新たな価値観や生き方を生み出す「デザイン思考」**を身に付けることで、地域住民の視点に立った課題やニーズを発見・解決することができる、**地域社会とつながる**人材の育成

〇目　標

・「ブーメラン人材」を育成することによる、**地元への人材の定着率の向上**。

・自らが「ブーメラン人材」として、他地域とのパイプ役となり移住者を増加させることによる、**持続可能な地域を作ることができる地域人材の育成**。

・地域課題の発見・解決に取り組む探究活動が、**生徒自身の進路実現と結び付く仕組の構築**。

〇背　景

本校の位置する伊方町は、**日本一細長い佐田岬半島の先端に位置**し、主な産業は農業や漁業という町である。本校は伊方町の最西端である三崎地区にあり、隣町までは車で 40 分程度を要する。伊方町は高齢化率が 47%を超えており、愛媛県内で２番目に高い自治体である。少子高齢化の急速な進展による年少人口の減少に加え、高校卒業後、進学や就職を機に都市部へ転出する若者が多いことなどが現在の状況を招いている。

〇教育を通じて育成を目指す資質・能力

・本校は地元をはじめ、県内各地や全国各地から多くの生徒が入学しており、**全校生徒の半数以上が寮生活**を送っている。このような状況において**「地元」や「地域」という言葉の指し示す範囲を再定義**するとともに、将来的に日本中に本校及び伊方町の関係人口を増やすことができる好機と捉え、バックキャスティング的に、現在必要とされる教育活動を行っていく必要がある。

・地域社会学科を設置することで達成すべき資質・能力として、**「社会に生きる一人の人間」としてたくましく生き抜く力**が挙げられる。この力は、少子高齢化や産業の衰退という社会課題最先端地域である伊方町全体を学びの場として、地域人材を外部専門家として定義し、地域と関わり地域の中での探究を推進することで、生活に根差した形から育成される。

・学校を含んだ伊方町全体を大きな学びのフィールドとした３年間の継続した活動を通して、伊方町への愛着を深め、**生涯にわたり本校及び伊方町と関わっていく姿勢**も育む。これにより、伊方町の関係人口を増やすことに加え、地域特別講師データベースを継続させ、地域の活性化につなげることができる。

・生徒は、自分たちのアイデアが、地域にとって有用か、実現可能か、持続して取り組むことができるかなど、検討・実践・改善を繰り返す中で、**課題を発見・解決するための方法や手段を体系化**し、汎用性のあるデザイン思考として身に付けていくこととなる。地域探究活動では、地域住民と対話してニーズを聞き取る共感力や対話力、協働的な解決方法のアイデアを生み出す力を育成し、**現状をより良い状況へ改善することを目的に、自らの行動指針を決定できる資質・能力を育成**する。

・自己理解なくしては、地域を理解し適切に関わることや探究活動における適切なゴールの設定は困難である。また、探究活動を通して正しく社会と関わっていくためには、その基礎となる教科の力が必要である。しかし、生徒は探究活動に必要な力と教科において育成する力とを分けて考えてしまう傾向にある。そこで、自らの探究活動の計画やゴールを設定する際に、その達成のために必要な力を各教科においてどのように育成していくのかを生徒自身に考えさせ、成果の検証において振り返らせることで、**探究活動を核としたより深い教科等横断的な学習を実現するとともに、教科等で身に付けた力を実社会で生かす力として活用できる力を育成**する。

３　実施体制

（１）管理機関における実施体制や事業の管理方法

◯実施体制

⑴　管理機関の役割

三崎高校が地域社会学科の設置に向けた検討をする中で、教育課程の編成や新しい学校設定科目の設置に関する指導を行い、新学科のカリキュラムが充実したものになるよう支援することとしている。また、運営指導委員会を設置し、県内外の有識者から指導・助言、成果に関する評価をいただき、本事業の運営に生かしていく予定である。

教職員体制に関する支援もすでに行っており、小規模校で地域活性化活動に取り組むことを希望する優秀な教員、三崎高校出身の優秀な教員及び同校勤務年数が長いベテラン教員を配置している。また、同校におけるＩＣＴ活用に関する教員・生徒への支援のため、ＩＣＴ教育支援員を県の一般財源で配置することとしている。

⑵　コンソーシアムの構成及び役割

「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力化型）」で構築された三崎高校のコンソーシアムは、多面的な立場から多くの助言をいただくことによって、教育活動の充実に結び付いている。同事業終了後も、コンソーシアムは継続し、今年度は、大正大学、株式会社 Prima Pinguino、伊予銀行が新たに加わることになっている。

コンソーシアムは立案された計画や、実施状況に基づく助言等を踏まえて、プロジェクト全体に対する提案・支援等を行う。実際の活動において求められる支援としては、事業実施中のプロジェクトに対する新たな視点からの提言や、その実現を可能にする外部人材の紹介・調整等が挙げられる。また、コンソーシアム関係者にも各教科の授業や課題研究活動の講師として招くことで、生きた組織として活動していくとともに、三崎高校の教育目標を共有した上で、豊かな学びの土壌を醸成することができるコンソーシアムの編成を目指す。

⑶　コーディネーターの配置（委託費）

構想調書提出時に想定したコーディネーターの方が、仕事の都合上、任用が難しくなった。現在、三崎高校と連携し、適切な人材を探しているところである。コーディネーターについては、高校と地域社会の協働体制づくり、地域社会に開かれたカリキュラムづくり、新たな人の流れと多様性ある教育環境づくりなどができる、コーディネーターとしてスムーズかつ、的確に三崎高校と関係機関をつなぐ人材を想定している。

◯事業の管理方法

管理機関である愛媛県教育委員会においては、これまで「地域に生き地域とともに歩む高校生育成事業」（本県事業）、「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」など、地域協働に関する様々な事業の管理・運営に関わってきた。また、本県高校等がＳＧＨの指定を受けた経験や、現在ＳＳＨの指定を受けている学校もあるため、これまでに蓄積してきた事業成果やネットワーク等を生かし、三崎高校に助言を行うとともに、本事業において他団体や外部人材を積極的に活用することとしている。

三崎高校では、各年度を３期に分けてスケジュールを立てており、カリキュラム再編の検討のための校内会議を各学期２回の年間６回計画し、長期休業中には校内研修や先進校との情報交換等も計画している。これらのスケジュールを管理し、適切に事業が行われるよう指導するとともに、会議の内容について報告を受け、助言等を行う。

また、運営指導委員会として、「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力化型）」で運営指導委員を委任した方々に加え、大正大学地域創生学部教授である浦崎太郎氏、株式会社 Prima Pinguino の代表取締役である藤岡慎二氏への委任も予定している。浦崎氏及び藤岡氏からは、地域社会学科の設置に向けて、高校と地域との協働の視点から、専門的なアドバイスをいただくこととしている。このように、研究者や地域教育の中核となる人材に、指導・助言していただくことで、三崎高校の事業が同校の生徒、教職員だけではなく本県全体の財産となるよう管理・運営する。

※運営指導委員会、コンソーシアムともに年２回以上の活動を予定している。

（２）管理機関における事業全体の成果検証、評価のための体制、考え方

◯事業全体の成果検証について

本事業の成果検証については、以下のことを通して、**管理機関が責任を持って行い、三崎高校にフィードバック**することとする。

・運営指導委員会及びコンソーシアム代表者会議における、進捗状況の確認及び改善点等の協議。
・三崎高校が校内成果発表会や各種発表会へ参加し、幅広く情報を発信。
・愛媛県教育委員会が主催し、県内高校等が、指定を受けた各種事業の取組や、独自の研究実践について発表し、その成果を広く高校生・中学生にまで普及する「えひめスーパーハイスクールコンソーシアム」で、同校が発表することによる成果の普及。
・学校評価やアンケートを、学校及びコンソーシアム等で実施。
・卒業生の追跡調査を行い、特に県外進学者・就職者の動向を調査。
・ルーブリックを用いて、生徒個人の振り返りを実施。　など

◯評価のための体制・考え方

評価については、三崎高校が本事業において目指している**「社会とつながり、たくましく生き抜くことができる生徒の育成」**が達成されているかに注目し行うこととする。

「地域との協働による高等学校教育改革推進（地域魅力化型）」で構築した校内や運営指導委員会等からの評価体制に加え、**地域の人や卒業生、現在交流のある県外の高等学校などにもアンケート等を実施**し、より多くの人から客観的な評価をいただき、事業の運営に生かすこととしたい。そのためにも、コンテストや発表会への応募、ホームページやＳＮＳ、フリーペーパーなどでの情報発信などを行いたい。

また、具体的な成果目標については、目標設定シートにある以下の観点に基づいて行っていくこととする。

・生徒による３年間の地域探究活動を通して、地域を担う人材としての資質・能力の向上度
・大学等進学者数のうち、将来**出身地での就職を考えている生徒数**及び**地域創生関係の大学・学部等への進学者数**
・高等学校卒業後及び大学等卒業後の**出身地への就職者数**の割合

年度末に、成果検証とともにこれらの評価を行い、**実施内容やカリキュラムなどを修正していき、学校はもちろん、地域や県外の方からも評価していただける学科を設置**したいと考えている。

※「３−⑴管理機関における実施体制」の補足

本県では、今年度から、**「えひめ版ＳＴＥＡＭ教育研究開発事業」を実施**することとしており、三崎高校とも連携し、研究開発を進めていきたい。

（３）学際領域学科又は地域社会学科を設置する高等学校における事業の管理方

◯事業の管理方法

平成 27 年度からこれまでの７年間の地域探究活動において、本校が築き上げてきた実施体制において、本事業の管理を行う。本校では、**校務分掌として４年前に地域協働課を立ち上げ**、地域探究活動の窓口として活動に取り組んできた。本事業においても、**地域協働課を中心とした校内運営組織を作り、事業を推進していく**。

◯具体的な方策

⑴　地域社会とつながる授業

「総合的な探究の時間」や学校設定科目「未咲輝（みさき）学」において研究テーマごとに生徒を縦割りにしたグループ（以下、「研究グループ」という。）に、複数の担当教員を配置し、全教職員が探究活動に関わることとし、研究グループごとに毎時間生徒が活動記録を記入し、担当教員が確認することで毎時間の活動の記録及び管理を行う。本事業においては、これまで行ってきた地域探究活動の実施体制を基にしながら多様な資質・能力、興味・関心を持つ生徒一人一人が、より主体的に活動することができるよう、**個人探究活動の集合としてのグループ探究活動の在り方や、探究サイクルを分割することによる探究活動の高密度化などの新たな実施体制づくり**に取り組む。

⑵　教科等横断型授業

単元縦断及び教科等横断的な取組を推進していくために、定期考査終了後など、新単元に入るタイミングにおいて、**校内カリキュラム検討委員による検討会**を開くこととする。また、毎年校内で実施している研究授業において、**教科等横断的な内容による研究授業を、年に複数回実施**することで、教職員の研修の機会を確保することとしたい。

⑶　地域協働課員の役割

地域協働課員は、必要な外部人材の紹介、調整を行ったり、研究グループごとの連携を図ったりするなど、担当教員のサポートを行う。また、研究グループの担当教員や代表生徒が定期的に進捗状況等を話し合う場を設定することで、各研究グループがスムーズな情報交換を行い、それぞれ連携したり、サポートし合ったりしやすい環境を作っていく。さらに、本事業において設置されるコーディネーターと連携を取ることで、これまで以上に校内外の人材の交流を促進していきたい。**生徒を活動の中心に置き、複数の担当教員がサポートを行い、その外側で地域協働課がサポートを行いながら、研究活動全体をマネジメント**していく。また、各研究グループでの代表生徒が、学校の代表として地域おこし活動を行う「せんたん部」を運営し、月に一回程度情報交換会を行う。

⑷　コーディネーターの役割

地域社会学科設置に向け、外部とのハブになり、地域における探究活動のスムーズな実施のための素地を作る。さらに、開かれた学校としてコンソーシアムをはじめとした地域や関係者の方々に本事業を含めた、学校活動全体のサポートをしていただく。

月に２回程度、授業担当教職員とコーディネーターが、「総合的な探究の時間」及び「未咲輝（みさき）学」等における探究学習の進捗状況の報告及び今後の活動方針を練るための会議を実施する。また、コーディネーターは職員室に常駐し、日頃から密に情報交換を行い、効果的な教育を推進する。

（４）管理機関及び申請校における研究開発の実績（申請校が新設校の場合、管理機関における実績のみを記載

◯「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」以前の実績（Ｈ27～Ｈ30）

・地域の和菓子店との協働で新たな特産品となる地元佐田岬産の温州みかんを用いた「みっちゃん大福」を研究開発（H27）。のちに、「こんなのあるんだ！大賞 2019」大賞を受賞（R元）。

・漂着物であるブイ（魚等の養殖で使う直径 30 センチメートルほどのプラスチック製の浮き）を中心とした漂着物を再利用し、地域の方と協働して制作したブイアート作品「登龍門」が「えひめ愛顔のこども芸術祭」でグランプリとなる県知事賞を受賞（H28）。

※この取組は現在の生徒にも受け継がれ、アート作品の制作だけではなく、ブイを使ったスポーツイベント「ブイリンピック」を開発し、地域のイベントや地元中学校の運動会で実施されている。昨年度、大分県で開催された楽しみながら環境について考えるイベント「おおいたうつくし感謝祭」においてブース出展を行うなど、現在も活動の幅を広げている。

・高校生シンポジウム「せんたんミーティング」を立ち上げ、高知県立須崎高等学校、香川県観音寺市の高校生まちづくりグループ、愛媛県立野村高等学校、愛媛大学、名城大学、尾道市立大学等の、高校生・大学生を招聘し活性化事例を共有するシンポジウムを行い、生徒自らが、準備（手配・広報・会場設営等）から当日運営（司会・受付・機器類オペレーション・まちあるき実施）などを実施（H29～）。

・生徒自らが地域住民へのインタビュー、調整をはじめとした制作業務を担うとともに、上映会の実施運営も行った地域ＰＲのための短編映画「せんたんビギンズ」の撮影及び上映（H30）。

◯「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」の実績（Ｒ元～Ｒ３）

・町内の一つの集落全体を舞台と見立てて各研究班がそれぞれの研究成果を発表する「せんたん劇場」の開催（Ｒ元）。

・廃校となった地域の中学校を舞台に 15 以上の外部団体と二つの高校に参加してもらった「みさこうマルシェ（廃校活用イベント）」の開催（Ｒ元）。

・地元の海水から自分たちで精製した塩を使って開発したオリジナルスイーツを提供する「みさこう café」のオープン（Ｒ２）。

・「えひめ地域づくりアワード・ユース 2020」最優秀賞（Ｒ２）

・「第３回ダルメイン世界マーマレードアワード＆フェスティバル日本大会」金賞並びにベストカテゴリー賞・銅賞（Ｒ３）

・「EGF キャンパスアワード」優秀賞（Ｒ２・３年度）・三浦工業賞（Ｒ３年度）

・「第８回ディスカバー農村漁村の宝」特別賞【先端発信賞】（Ｒ３）

・「第 12 回地域再生大賞」優秀賞（Ｒ３）

※本校の取組は高い評価を得ており、本校での探究活動に魅力を感じた志願者が全国から入学しており、生徒数の増加にもつながっている。

（５）運営指導委員会の体制

所属	氏名	主な実績
大正大学地域創生学部教授	浦崎　太郎	「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」企画評価会議 座長
株式会社 Prima Pinguino 代表取締役	藤岡　慎二	総務省地域力創造アドバイザー 産業能率大学経営学部 教授
愛媛大学社会連携推進機構	秋丸　國廣	「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」運営指導委員
文部科学省総合教育政策局 ＣＳマイスター	西村　久二夫	
いよぎん地域経済研究センター	森　洋一	
伊方町立三崎小学校	野井　純	
伊方町立三崎中学校	野村　雅英	
伊方町役場総合政策課	菊池　嘉起	
伊方町教育委員会事務局	阿部　茂之	
町見郷土館	高嶋　賢二	

（６）運営指導委員会が取り組む内容

○運営指導委員会は、年に２回以上開催し、事業の運営や実施状況等につき専門的見地からの指導・助言、成果に関する評価をいただく。生徒一人一人の能力・適正、興味・関心等に応じた学びを実現するためには、**地域社会との協働活動は必要不可欠であり、その実現のための実施体制の構築支援等に特に注力**していく。

○大学研究者や地域教育の中核となる人材に参加してもらうことで、三崎高校の事業が**普通科改革の実現及び高校魅力化の先進事例として、同校の生徒・教職員はもちろんのこと、愛媛県全体の財産となるよう管理・運営する**。

４　学際領域学科又は地域社会学科における取組

（１）学際領域学科又は地域社会学科におけるカリキュラムや教育方法等の特色・魅力ある先進的な教育の内容（学校設定教科・科目の詳細は別添１「学校設定教科・科目の設定に関する説明資料」に記載。）

〇本事業における本校の目的

・「社会に生きる一人の人間」として、変化の激しい社会をたくましく生き抜くことができる人材の育成

・新たな価値観や生き方を生み出す「デザイン思考」を身に付けることで、地域社会とつながる人材の育成

これらを実現するために、各教科において「地域社会とつながる授業」と、地域探究活動を軸とした新たな「教科等横断型授業」の実施を大きな柱としている。これらの取組を進める中で、外部専門家や地域人材等との協働体制の構築に取り組むとともに、本校独自のＳＴＥＡＭ教育を実践し、生徒に幅広い視点を身に付けさせたい。

〇地域社会とつながる授業

・「総合的な探究の時間」の活用

➢地域探究活動の深化

➢地域を生かしたキャリア教育

➢中学校と連携した地域探究活動

・学校設定科目「未咲輝（みさき）学」（総合）

➢地域理解（地域の歴史や地元企業について学ぶ）

➢データサイエンスを学び、ＲＥＳＡＳ、e-Stat などのビッグデータの利活用

➢地域探究活動や起業家育成プログラムなどを実施

※データサイエンスを学び、ビッグデータを用いて、地域課題をエビデンスに基づいて分析することで、地域探究活動や起業に関する学びを深めることができる。

・県内外高校との連携（現在、石川県立能登高校や立命館宇治高校等と連携中）

・大学や企業との連携

・その他の特色ある学校設定科目

「地域文化と国語」（国語科）：地域の伝承や文学者を教材とし、吟行や拓本などの体験活動を実施

「郷土芸能概論」（芸術科）：地域の伝統芸能や地域行事に参加し、和楽器の演奏方法を学習

「トライブラーニング」（総合）：ボランティア活動や他校との協働活動を実施

〇教科等横断型授業（社会をたくましく生き抜く人材の育成）

・年間指導計画に組み込み、計画的に実施

・実社会や日常生活の課題について、異なる教科からアプローチ

・「多面的に学び、考える力」を育成

・本校独自のＳＴＥＡＭ教育の実施

・教科等横断型授業の例

「防災」→数学×保健体育×地理

「販売促進」→商業×データサイエンス×公民　など

（２）コンソーシアム等の関係機関等との連携・協力体制の構築の考え方・方法

○「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」において構築したコンソーシアムを基に、本事業でも関係機関との連携・協力体制を構築する。**令和元年度に８団体でスタートした本校コンソーシアムは、令和３年度には 12 団体に増え、更に今年度には 15 団体**となる予定であり、地域探究活動を通して多くの人々とつながり、協力体制を築くことができている。コンソーシアム関係者は、年に２回の会議だけではなく、オンラインを活用した遠隔授業、学校設定科目「未咲輝（みさき）学」での特別授業など積極的に教育活動に参画している。本事業においては、本校が特色としている地域とつながる地域連携授業や、地域を軸とした教科等横断型授業の推進のため、「総合的な探究の時間」や「未咲輝（みさき）学」以外の**各教科の授業においても、コンソーシアム関係者に積極的に参加していただく**ことになっている。また、地域行事やインターンシップなど、学校外での地域活動における生徒の受け入れをコンソーシアム関係者に依頼する計画をしている。

○**今回配置するコーディネーターが、コンソーシアムなどの外部との連絡・調整等の業務を担うことで、担当者の負担軽減及び本事業のスムーズな運営が可能になる**。関係機関との連携・協力体制の構築において重要な役割を果たすのが、コーディネーターであることから、業務内容や、地域人材の活用方法等の詳細については、他県の先進校や大学関係者から情報を収集し、より効果的な運用ができるよう準備を進めたい。

（３）コンソーシアムの構成員

所属	氏名	主な実績
大正大学	**浦崎　太郎**	**「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」企画評価会議 座長**
株式会社 Prima Pinguino	**藤岡　慎二**	**総務省地域力創造アドバイザー 産業能率大学経営学部 教授**
株式会社伊予銀行	**松岡　建夫**	**金融教育講演会講師**
愛媛大学	笠松　浩樹	「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」コンソーシアム構成団体
専修大学	大崎　恒次	
一般社団法人佐田岬Ｓプロジェクト	宇都宮　圭	
NPO 法人さだみさき夢希会	田村　義孝	
NPO 法人二名津わが家亭	増田　克仁	
佐田岬みつけ隊	黒川　信義	
伊方町役場総合政策課	宮本　廉	
伊方町教育委員会委事務局	三好　要	
一般社団法人 E.C オーシャンズ	岩田　功次	
MIGACT	濵田　規史	
愛媛県教育委員会高校教育課	川本　昌宏	
公営塾未咲輝（みさき）塾	神宮　一樹	

（４）配置するコーディネーターの属性や役

所属	氏名

当該者の主な実績

構想調書提出時に検討していた、本校の公営塾講師（地域おこし協力隊）の方が仕事の都合上、コーディネーターを引き受けていただくことが困難となったため、現在新たな候補者を検討中である。

コーディネーターが取り組む内容（勤務形態を含む）

〇取り組む内容

・地域社会学科設置に向け、新しいカリキュラムの研究開発を行う。
・「地域社会とつながる授業」と「教科等横断型授業」**の年間指導計画と実施内容の検討**を行う。
・伊方町３地区に配置されている伊方町のコーディネーターと連携を図り、それぞれの地区の課題解決のための情報共有を行いながら、活動を行っていく。また、それぞれの地区に担当教員を配置し、**地域、学校、コーディネーターの三者が常に連携をとることで、充実した地域と学校の連携・協働の推進**に取り組んでいく。
・地域探究活動を行う際、コンソーシアムなどの外部機関との連絡・調整を行う。
・地域探究活動における教員・生徒のサポートを行う。
・「地域みらい留学」などにおいて、**県外生徒募集活動のサポート**を行う。
・**本校独自の「地域特別講師データベース」を立ち上げ、その運用**を行う。
・本校が新しく地域社会学科設置することや地域探究活動での取組などについて、ホームページやＳＮＳ、メディア等で情報発信を行う。　など

〇勤務形態

・勤務時間：１日７時間、週５日、35 時間の勤務
・**三崎高校の職員室に常駐し、校務分掌も地域協働課の一員**として、地域探究活動の企画・準備・運営などに、教職員や地域住民とともに取り組んでいく。初年度においては、同校地域協働課員とグループを作り業務を行うことで、コーディネーターの支援を行う。また、コンソーシアム構成員と定期的な意見交換を行う場を設定し、円滑な業務の実施をサポートする。

（５）学際領域学科又は地域社会学科の設置及び設置に向けた検討に関する生徒、保護者、地域等への説明の実

地域社会学科設置に向け、生徒・保護者へは、本校で実施する「中学生１日体験入学」、各中学校での高校説明会、一般財団法人 地域・教育魅力化プラットフォーム主催「地域みらい留学」、本校ＨＰ・ＳＮＳ（Instagram 等）による説明、地域の方々へは、シンポジウム（運営指導委員やコンソーシアムの参加者の中から６名程度の方に依頼）や学校評議員会等での説明会を検討している。説明の中では次のような内容で、今後の三崎高校の方向性を明確に打ち出したい。また、対象は現中学２年生となるので、早急に準備を進め、新学科設置をアピールしていくこととしたい。

〇新学科へ変更する目的

伊方町では、少子高齢化が急速に進み、人口減少、高齢化率の上昇は、大きな課題となっている。そこで、伊方町では平成 28 年度から、「伊方町まち・ひと・しごと創生総合戦略」を策定し、「伊方町・移住定住促進協議会」を発足させるなど、町ぐるみで人口流出対策に取り組んでいる。

本校も、伊方町唯一の高校として同協議会の構成メンバーに加わり、伊方町と連携し魅力化創出活動に取り組んできた。また、令和元年度から「地域との協働による高等学校改革推進事業（地域魅力化型）」による取組を行ってきたが、「総合的な探究の時間」と学校設定科目「未咲輝（みさき）学」の中での学習が中心であった。

今回、地域社会学科の設置に当たり、特色ある学校設定科目を新たに設置し、探究的な学習や体験活動等を通じ地域社会と協働しながら、地域課題の発見、解決に必要な資質・能力を育成する地域探究活動を充実させることとしている。

このような地域探究活動を通じて、生徒は、社会をたくましく生き抜く力や「デザイン思考」を身に付け、地域社会とつながる人材に成長すると考えている。

〇特色ある新学科と教育課程及び進路指導

現在、就職・専門学校進学希望者、文系大学等への進学希望者、理系大学等への進学希望者に対応した３コースに分かれて教育課程を編成している。

今回、地域社会学科の設置に当たり、現在の３コースに１コースを加え、Ⅰ型（就職・専門学校希望者）、Ⅱ型（大学の社会共創系学部等進学希望者）、Ⅲ型（文系大学等への進学希望者）、Ⅳ型（理系大学等への進学希望者）の４コースで、多様な生徒のニーズに応えていくこととしている。特に、Ⅰ型とⅡ型については、「総合的な探究の時間」と学校設定科目「未咲輝（みさき）学」と各教科、各科目とを連動させ、地域と連携した体験学習を深化させたい。また、三崎高校地域社会学科が特に力を入れている「地域社会とつながる授業」と「教科等横断型授業」により、課題解決力や論理的思考力等を身に付けることができるとともに、学びの強い動機付けとなり、学習意欲がアップし、進路実現の一助となる。また、地域探究活動を通して向上が期待できる、論文を作成する力やプレゼンテーション力などは、各種推薦入試等で重要な要素となる。

５　実施計画

（１）３ヶ年の実施計画の概要

〇令和４年度（１年目）

・コーディネーターを配置し、すでに**伊方町３地区に配置されているコーディネーターや本校教員と連携**させることで、高校をハブとした連携組織を作成する。

・コーディネーターと地域協働課の教員を中心に、地域人材をリストアップした**本校独自の「地域特別講師データベース」を作り、講師を登録し、授業や地域探究活動などへ派遣するためのスケジュール調整等を行う**。また、作成したデータベースを活用して、地域と連携した学習活動を各科目で年間一回以上行う。

・**年間指導計画を見直し、「教科等横断型授業」を組み込む**ことで、現在の教育課程の中において、「総合的な探究の時間」及び「未咲輝（みさき）学」と各教科の連携授業などを実施する。

・地域社会学科令和６年度入学生の教育課程の研究及び編成を行う。校内のカリキュラム編成委員会で、大学関係者など外部の専門家の助言を受けることで、**生徒にとってベストな教育課程を編成**する。

・令和６年度入学生には、地域社会学科の学科名やカリキュラムなどの構想が固まった時点で、中学校の説明会やホームページ、ＳＮＳなどで、**特に中学２年生とその保護者に、強くアピール**していく。地域に対しても、伊方町役場等も協力を得ながら、広報活動をしていく。

〇令和５年度（２年目）

・本格的に、**新学科の詳細及び特色を中学３年生とその保護者に向けて、アピール**する。現在行っている本校の中学生一日体験入学や各中学校の説明会での情報発信に加え、本校独自の説明会を行うなどして、積極的に新学科設置の趣旨とその魅力の普及に努める。

・新学科の教育課程を完成させ、愛媛県教育委員会に申請する。

・「地域社会とつながる授業」と「教科等横断型授業」について、前年度の改善点などを抽出し、校内のカリキュラム検討委員会等で協議する。

〇令和６年度（３年目）

・「地域社会学科」を設置。

・新しい教育課程での授業実践や、地域探究活動などの教育活動を行いながら、その効果や改善点などの確認を行っていく。

・１年間を通しての長期の検証に加え、**各学期で中期的なＰＤＣＡサイクルを構築することで柔軟に修正を加えながら、生徒や学校、地域の実態に合った地域社会学科へとブラッシュアップ**していく。

・コーディネーターの役割や業務内容、地元のコーディネーターとの連携についても、実態に即した運用ができるように関係者で定期的に協議する。

・「地域特別講師データベース」についても、事業全体の必要性を図りながら積極的に**新しい人材の開拓**を行う。

（２）令和４年度の計画の内容

月	事業の内容	
	カリキュラムや教育方法等の開発	関係機関等との連携・協力体制の構築
６月	・１年生「えひめ未来創造人材育成事業」の実施 ・「エネルギー対策ディベート」の実施（１年生） ・せんたんプロジェクト各６班中間報告会（２・３年生）	・三崎保育所、社会福祉法人伊方社会福祉協会（つわぶき荘）との連携協力 ・四国電力、愛媛大学と協働 ・各地域メンターと連携協働
７月	・未咲輝（みさき）学Ⅰ「ブイアート」実施（１年生） ・未咲輝（みさき）学Ⅰ「地域理解」ポスターセッション開催（１年生） ・みさこうフェスティバル開催（全学年）	・NPO 法人さだみさき夢希会と連携 ・佐田岬みつけ隊黒川氏を講師として招致 ・三崎保育所、三崎小学校、三崎中学校、瀬戸中学校、伊方中学校と協働
８月	・オープンハイスクール開催（１年生） ・高校生 SR サミット「FOCUS」参加（１・２年生希望者） ・県外視察研修の実施＠宮崎県立飯野高校（希望者） ・「みさこうマルシェ」開催（せんたん部、希望者）	・立命館宇治高校と連携協働 ・宮崎県立飯野高校と連携協働 ・NPO 法人二名津わが家亭他、民間団体と連携協働
９月	・「第４回せんたんミーティング」開催（せんたん部、希望者） ・愛媛県主催「EGF キャンパスアワード 2022-2023」ビジネスプラン提出（３年生、希望者） ・未咲輝（みさき）学Ⅰ「インターンシップ」実施（１年生） ・未咲輝（みさき）学Ⅱ「RESAS」中間報告会（２年生） ・みさこう郷土芸能部活動スタート（希望者） ・「八幡浜ソーシャルビジネスチャレンジコンペ」ビジネスプラン提出（１・２年生希望者）	・愛媛大学、北九州市立大学他、民間団体及び県内外の高校と協働 ・伊方町内を中心とした企業 ・佐田岬みつけ隊黒川氏、町見郷土館高嶋氏を講師として招致 ・三崎地区青年団をはじめとする地域の方々と協働 ・佐田岬みつけ隊、MIGACT と連携協働
１０月	・「ふるさと CM 大賞」作品提出（希望者） ・未咲輝（みさき）学Ⅱ「地方創生☆政策アイデアコンテスト 2022」プラン提出（２年生）	・伊方町役場と協働
１１月	・みさこう郷土芸能部発表（希望者） ・未咲輝（みさき）学Ⅱポスター掲示 ・未咲輝（みさき）学Ⅲファイナルプレゼンテーション開催（３年生）	・三崎地区青年団をはじめとする地域の方々と協働 ・MIGACT 濵田氏、SPC 代表横山氏を講師として招致

１２月	・2022 模擬国連 MUN 参加（２年生希望者） ・県外視察研修の実施＠島根県立隠岐島前高校（希望者） ・保小中高合同アートイベント「MAP」開催（希望者） ・愛媛県主催「EGF キャンパスアワード 2022-2023」発表（３年生、希望者） ・進路相談会	・立命館宇治高校、福岡雙葉高校と連携協働 ・島根県立隠岐島前高校と連携協働 ・三崎保育所、三崎小学校、三崎中学校と協働 ・南予地方局及び地域の企業と連携
１月	・Global Youth Fair～SURVIVE!～参加（１ ・２年生希望者）	・立命館宇治高校と連携協働
２月	・「未咲輝（みさき）-SENTAN-発表会」開催（全学年） ・グローカルリーダーズ summit 参加 ・フィリピンオンラインスタディツアー参加（１年生）	・各連携団体と連携協働 ・宮崎県立飯野高校と連携協働 ・民間 NPO 法人アクセスと協働
３月	・「せんたん新聞」発行	・伊方町役場と連携協働

（３）事業の進捗状況の定期的な確認や改善の仕組み（事業のアウトプットやアウトカムの考え方、目標指標の設定は別添２「目標設定シート」に記載。）

〇教育活動全般について

・学校長のリーダーシップの下、全教職員で共通認識を図りながら学校で一丸となって、本事業をスムーズに運営できるよう努める。

・各学期末には、職員会議等で進捗状況の確認や実施事業の振り返りを行う機会を設ける。

・Teams などのチームコミュニケーションツールを用いることで、気付いたことや提案等をいつでも気軽に共有できる校内の仕組み作りを行う。

・本事業の進捗状況や打合せの内容、生徒及び教職員からの提案、授業研修会で出た意見などは運営指導委員会・コンソーシアムで共有し、多くの人から評価及び助言をもらうことで、事業の進捗状況の確認及び改善を図る機会とする。

〇授業について

・校内の２クラスを指定した一般公開の「焦点授業」を実施し、地元中学校の教職員にも参観してもらい、その後、授業研修会を実施する。

・「焦点授業」のうち、１クラスは「地域社会とつながる授業」を実施し、授業改善や教員、生徒の意識改革につなげる。

※令和２年度には、「国語総合」の授業において、『奥の細道』を学習後、愛媛県南予地域を代表する俳人である、芝不器男についての学習を行うとともに、実際に俳句を作り鑑賞するという授業を行った。作成した俳句は実際に「第 67 回不器男忌俳句大会」に投句した。その結果、最優秀賞として１名、入選として６名の生徒が表彰された。

・「焦点授業」のうち、もう１クラスは「教科等横断型授業」を行い、実社会や日常生活の課題をテーマに、異なる教科の複数の教員で横断的な授業を行う。

・「焦点授業」の様子等は本校ホームページや Facebook を活用して、随時情報発信していく。

・生徒を対象としたアンケートを年２回実施して、授業の評価を行い、その結果を基に改善を行う。

〇「総合的な探究の時間」及び学校設定科目「未咲輝（みさき）学」について

・月初めと月末に授業担当教職員及びコーディネーターによる打ち合わせを実施する。

・月初めの会では、１か月の活動スケジュールを確認し、月末の会で進捗状況及び今後の活動方針の報告を行い、情報共有することで年間スケジュールにおける進捗状況等を確認する。

・必要に応じて、学校を代表して活動する「せんたん部」の生徒も交えた打ち合わせを行う。その際、「せんたん部」の生徒が各研究グループの進捗状況や要望事項等を報告することで、探究活動を「自分ごと」として捉え、自走性を高めることができる機会とする。

・生徒が記入するチャレンジシート（探究活動で自らが必要な力を各教科でどのように身に付けるかを記入するシート）による振り返りを基に評価及び改善を図る。

６　成果の普及のための仕組み

○本校では、「総合的な探究の時間」の研究発表会を年に２回（中間発表会、成果発表会）実施している。中間発表会は、本校文化祭に合わせた研究成果ポスターの作成及び掲示、成果発表会はオンライン配信を含めた対面での発表である。また、公共施設を使用しての出前発表会やオンライン発表会の強化などを行い、より多くの人に成果を普及できる発表会の在り方を研究していく。また、例年、生徒は各種シンポジウムやプレゼン発表会に参加させてもらい、本校の取組を発表する機会を得ている。今後も、それらの発表会等に積極的に参加するとともに、できるだけ多くの生徒が成果発表を行うことができる機会を作っていきたい。

○地域探究活動の研究成果を普及するための工夫として、平成 29 年度から開催している高校生シンポジウム「せんたんミーティング」の実施によるイベント形式の情報発信や、令和元年度から作成しているフリーペーパー「せんたん新聞」による刊行物としての情報発信、本校ホームページや Facebook ページによる即時性の高い画像・動画による情報発信などが挙げられる。これまでに本校が行ってきた様々な情報発信の更に効果的な活用法などを研究していきたい。地元地域への情報発信は対面による方法を、他地域への情報発信はオンラインによる方法を中心に研究を進める。

○地域の子どもたちは地域で育てるという共通認識の下、近隣の高等学校と高校生コンソーシアムを構築し、その成果を発表し合うなど地域内での横の連携の強化を図ることで、成果の普及に努めていきたい。

７　国の指定終了後の取組継続のための仕組み

○持続的な取組について

・これまでの７年間の地域探究活動において本校が培ってきたノウハウや、これまでに築いてきた外部人材とのつながりを基盤にしながら、本事業で新たに構築される支援体制を維持するために、校内研修を行うことで、持続可能な組織づくりを行う。

・本校地域協働課員やコンソーシアム構成員等が中心となり、ノウハウや校内研修の内容、研修方法などを整理していく。外部人材とのつながりについては、今回、立ち上げる「地域特別講師データベース」の継続的な運用により、引き継いでいくこととする。

・全教職員が関わる中で研修を積み、全教職員が「自分ごと」として捉えることができるよう、意識改革を行う。

・指定終了後のコーディネーターの配置について、県や伊方町と協議しておく。

○資金面について

・同窓会と連携して、「みさこう基金（仮称）」を設立し、同窓生を中心に広く呼びかけ、地域探究活動の資金源としたい。

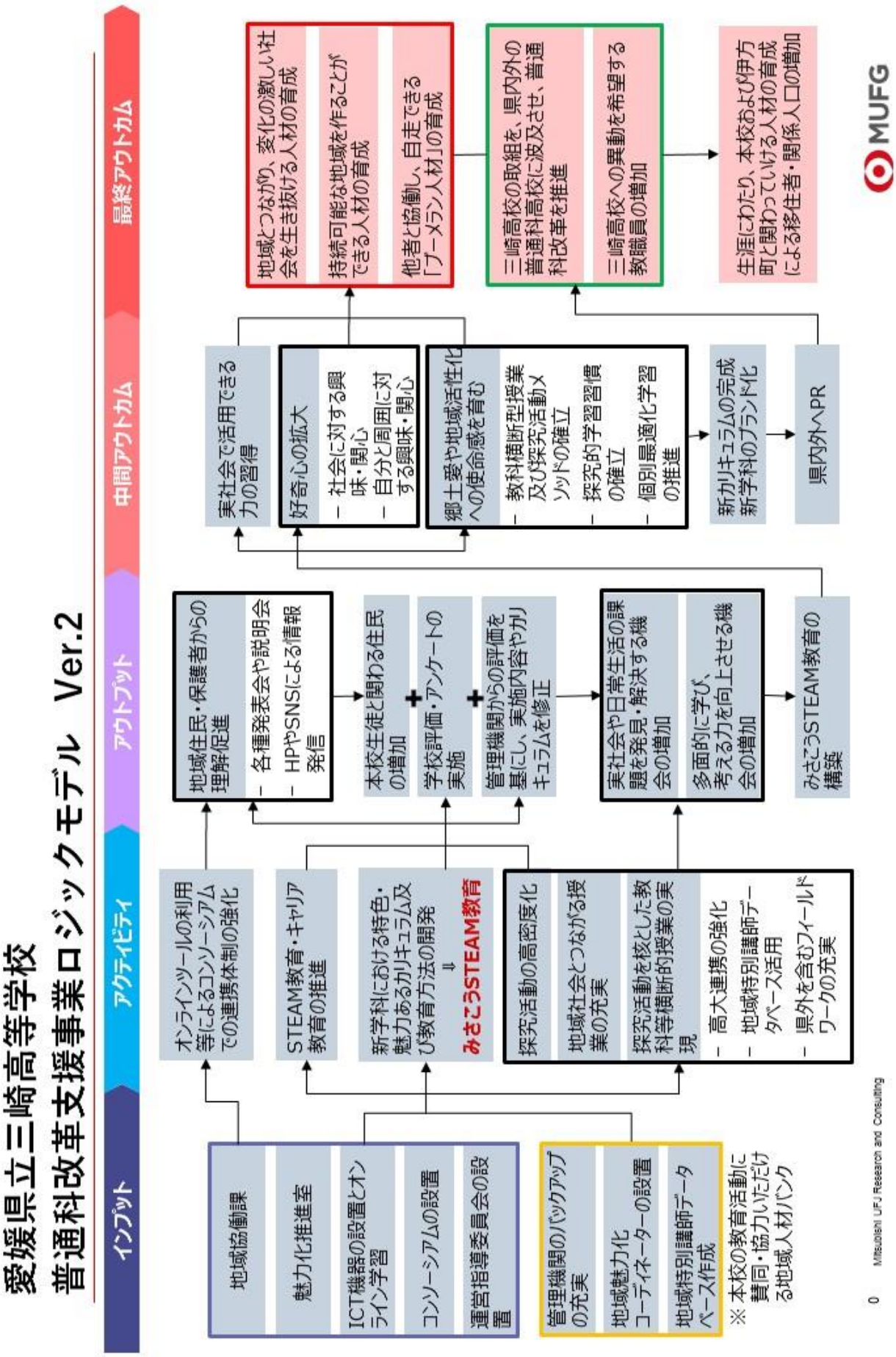
・話題性がある題材や規模が大きな活動については、クラウドファンディングなどを活用し、資金調達と情報発信を同時に行う。

・財団の助成事業などに応募し、支援を得る。　など

８　研究開発概念図

管理機関名：愛媛県教育委員会
令和４年度　新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）
【愛媛県立三崎高等学校】地域社会学科（令和６年度設置予定）
地域社会学科
●変化の激しい社会を生き抜くことができる人材の育成
➢地域探究活動を通した「生きる力」の育成
➢教科横断的な学びによる「多面的に学び、考える力」の修得
●地域社会とつながる人材の育成
➢他者と協働し、自走するブーメラン人材
➢新たな価値観や生き方を生み出す「デザイン思考」の醸成
●地域社会学を教育課程に位置付けたSTEAM教育・キャリア教育の推進
➢データサイエンスやプログラミング教育を学び、RESASなどのビッグデータを利活用
➢地元企業・自治体と連携したインターンシップや進路相談会などの実施
➢地域活性化につながる起業家育成プログラムの実施
みさこうSTEAM教育
論理的思考力
判断力
表現力
実践力
計画力
課題解決力
コミュニケーション
調整力
「輝く未来を咲かせよう」
これまでの７年間の地域探究活動の取組を基盤とした、先進的な「地域社会学科」を設置
オンリーワンのカリキュラムを開発
地域との連携をさらに強化
地域社会に開かれた教育課程
教科横断的授業
３年次「起業家育成」
◆起業プランの作成　◆研究成果発表会
◆他校との連携活動
充実した教科学習（１～３年）
総合的な探究の時間（１～３年）
特色ある学校設定科目
地域文化と国語（3年）
トライフラーニング（2・3年）
郷土芸能概論（１～3年）
未咲輝学（１～3年）
２年次「地域課題の発見・解決」
◆課題別研究　◆県外視察研修
◆せんたんミーティング　◆個別探究活動
１年次「地域理解」
◆地域見学　◆地域拠点での交流
◆異年齢者交流　◆インターンシップ
愛媛県立三崎高等学校
コーディネーター
・新カリキュラムの研究開発
・年間指導計画の作成
・地域と学校との連携の推進
・地域特別講師ＤＢの運用
・県外生徒募集のサポート
地域特別講師データベース
コンソーシアム
伊方町
公営塾
地域企業
大学等
NPO
地域住民
別紙様式3
運営指導委員会
愛媛県教育委員会（管理機関）

９　ロジックモデル


愛媛県立三崎高等学校
普通科改革支援事業ロジックモデル　Ver.2
インプット
アクティビティ
アウトプット
中間アウトカム
最終アウトカム
地域協働課
魅力化推進室
ICT機器の設置とオンライン学習
コンソーシアムの設置
運営指導委員会の設置
管理機関のバックアップの充実
地域魅力化コーディネーターの設置
地域特別講師データベース作成
※ 本校の教育活動に賛同・協力いただける地域人材バンク
オンラインツールの利用等によるコンソーシアムでの連携体制の強化
STEAM教育・キャリア教育の推進
新学科における特色・魅力あるカリキュラム及び教育方法の開発
⇓
みさこうSTEAM教育
探究活動の高密度化
地域社会とつながる授業の充実
探究活動を核とした教科等横断的授業の実現
- 高大連携の強化
- 地域特別講師データベース活用
- 県外を含むフィールドワークの充実
地域住民・保護者からの理解促進
- 各種発表会や説明会
- HPやSNSによる情報発信
本校生徒と関わる住民の増加
＋
学校評価・アンケートの実施
＋
管理機関からの評価を基にし、実施内容やカリキュラムを修正
実社会や日常生活の課題を発見・解決する機会の増加
多面的に学び、考える力を向上させる機会の増加
みさこうSTEAM教育の構築
実社会で活用できる力の習得
好奇心の拡大
- 社会に対する興味・関心
- 自分と周囲に対する興味・関心
郷土愛や地域活性化への使命感を育む
- 教科横断型授業及び探究活動メソッドの確立
- 探究的学習習慣の確立
- 個別最適化学習の推進
新カリキュラムの完成
新学科のブランド化
県内外へPR
地域とつながり、変化の激しい社会を生き抜ける人材の育成
持続可能な地域を作ることができる人材の育成
他者と協働し、自走できる「ブーメラン人材」の育成
三崎高校の取組を、県内外の普通科高校に波及させ、普通科改革を推進
三崎高校への異動を希望する教職員の増加
生涯にわたり、本校および伊方町と関わっていける人材の育成による移住者・関係人口の増加
MUFG
0
Mitsubishi UFJ Research and Consulting